

「なおも祈る」

ダニエル書 10 : 1 - 4

October.18.2020

## ダニエル 10 : 1 - 4 (パワポ)

### Preface

私が説教者として、主日礼拝の講壇に立つ時、一番怖いのが、見透かされてしまうことです。

どんなに立派な言葉で語ろうが、どんなにためになることを語ろうが、どんなにかっこつけようが、もし、主イエス様の慈しみと哀れみにすぎらない生き方をしているならば、その語っている内容に実がないことを見透かされてしまいます。

主日礼拝のこの講壇に立つまで、どれほど熱心に神の言葉に向き合い、向き合った言葉の前にひざまずき、泣き、頭を垂れ、心を暴かれ、罪が露わにされ、自分の足りなさ、ずるさ、怠惰さ、一切合切を神の前にさらけ出され、

それでもなお、はねのけることなく受け入れてくださり、また立ち上がる力を与えてくださり、送り出してくださる神の愛を経験し、そんな神と交わり、神と格闘する時間をしっかり通ってから、この講壇に立っているのか、それとも、通ったふりをしてこの講壇に立っているのか。

また、与えられた神の言葉を実践しようと努めたのか、それとも努めなかったのか、

口先ばかりで、全くもって行動が伴わなかったのか、それとも、出来ないなりに何とかやってみようと努力したのか、

人を愛することを諦めたのか、もしくは、諦めずに 0.1mm でもいいから愛したいと取り組みながら生きてきたのか、

そして、祈った祈りに促されて、働いたのか、それとも働かなかったのか、等、

説教をするために講壇に立った時、どんなに言葉を装うとも、にじみ出てきてしまう偽りを、見透かされてしまうことほど、説教者として怖いことはありません。

ここに立つまでに祈ってきた祈りが、本物の祈りなのか、それとも、偽りの祈りだったのかが、言葉を語ると、その言葉ににじみ出てきてしまうんです。

### Part One

モーセがシナイ山に登って、神と対話し、神の言葉を与えられ、神の言葉を民に宣べ伝えた時、彼の口から発せられる言葉は、正に神の言葉でした。

なぜならば、40日40夜、神に祈ったその祈りは、本物だったからです。

神の前に、命を懸けてすべてをさらけ出し、  
神様が語られた言葉を、例え人の思いにそぐわなかったとしても、実直に語り  
尽くす覚悟が与えられるまで、神と過ごし、祈りました。

だから、モーセが、「神はあなたがたを愛している。」と語れば、この言葉が、  
正に、神の愛の言葉に聞こえるんです。

ダニエルも然りです。

ダニエルも、神の言葉の前に自らをさらけ出し、誰が何と言おうとも祈ることを  
辞めることはなく、神の声に心ばかりか人生を傾け続けてきました。

だから、ダニエルの語る言葉からは、神が神であることを人々が感じました。

そして、そんな彼らに共通しているのが、神の前に、自分の弱さを素直に認める  
ことが出来たということです。

弱いことを謙遜に認めることが出来たから、祈れました。

私たちは常日頃、弱さを感じているにもかかわらず、

ともすると、自分のことを知者だと思い、自分は経験豊かだと思い、自分の良  
識見識こそ正しいんだと思い、自分にはそれなりの力があると思ってしまいま  
す。

そして、行きつくところ、祈る時間がもったいないと錯覚して、祈ることもせ  
ず、やり過ぎそうとしてしまいます。

ただここで皮肉なのは、今日の聖書箇所が登場するダニエルよりも、社会的にも、  
経済的にも、身分的にも、すみません、もしかしたら信仰的にも強い人は、  
そうはいないにもかかわらず、自分の弱さを、神の前に真に認識することが出来  
ないということです。

このダニエル書10章に出てくるダニエルは、社会的にも、経済的にも、身分  
的にも、とてつもなく強い力を持っている人でした。

また、ここまでダニエル書を見てきましたように、信仰的には、言わずもがな  
です。

ダニエルは、バビロン帝国の高級官僚として生きてきただけでなく、その次の  
ペルシア帝国においても、王が彼に助言を求めるだけでなく、彼のために特別な  
役職と支配権を与えるほどの権力と地位がありました。

ある意味、人が羨む物は、すべてその手中に治めているような状態です。

立派な家で、望めばいくらでも王のみが口にする事の出来る食事を毎日摂ることも出来、執事や臣下・部下に囲まれ、この時のダニエルは90歳ほどだと思われませんが、残る余生、悠々自適どころか、悠々自適を遥かに勝る生活が約束されているような人です。

先ほど読んだ10：4には、

### ダニエル10：4 (パワポ)

とありますが、私たちが一人で、桜川の土手を散歩するようにいたというのではなく、たくさんの臣下と、部下と、お手伝いさんを引き連れて、ティグリス川の川岸に、気分転換に来ていたということです。

ダニエルは、ただの気分転換にも、多くの人に関わるような力を持っていた人です。

そんな力を持つダニエルなのですが、ダニエルは、神の前には、自分が弱い存在であるということを、ひと時も忘れたことがありませんでした。

その表れが、今日の聖書箇所のだニエルの断食の祈りです。

## Part Two

### ダニエル10：1-3 (パワポ)

ここでのダニエルが置かれている状況については、来週以降、詳しく見ていきたいと思うのですが、

今ダニエルは、90歳という高齢で、3週間の断食祈禱をしています。

ただでさえ、高齢による体力の衰えがあるはずなのに、傍から見れば、自殺行為にしか見えない、または、「栄耀栄華を極めた人が、何が恨めしくて」と思われるような断食祈禱です。

でも、ダニエルは、いつでも、神の前には、自分の弱さ、貧しさ、足りなさ、罪深さを認識しました。

栄耀栄華を手中に治めたことが、ダニエルにとって、祈らない理由にならないんです。

栄華を極めようが、名声を得ようが、財産を手に入れようが、それでもなお、祈るんです。

なぜか。

弱いからです。

神の前に、自分の弱さと無力さとはかなさを認め、なおも正直に告白するので  
す。

病の時でさえ祈らず、破産した時でさえ祈らない。

祈るよりもまずは治療、祈るよりもまずは資金繰りと、弱くなっている場面でも、神の前にあって、その弱さを認識しようとしめない私たち、また、滅びたイスラエルの民たちとは大違いです。

### Part Three

今、早天祈祷会でエレミヤ書を学んでいるのですが、エレミヤ書40章あたりを見ますと、国が滅びて、民族が滅びて、大多数の民がバビロンに捕虜として捕まっていた状況の中、少しばかり残ったイスラエルの民たちが取った行動について記されています。

何もかもなくなり、残された民たちの中でも無益な反逆が起こって、もう虫の息の息のような状態になっているイスラエルの残りの民たちの取った行動は、  
自分たちのこれでもかというほどの弱さを認め、神の前にひざまずき、慈しみと哀れみを願って祈るのではなく、  
エジプトに頼ることでした。

エジプトに頼ったところで、何にもならないし、むしろ、虫の息の息さえも無くなってしまおうと言われても、「私たちは、神の言葉なんかには従えん！ 私たちは、私たち自身の言葉に従って行くまでだ！」と、預言者エレミヤに啖呵を切って、結局、エジプトで木っ端みじんに砕け散ってしまうんです。

なおも、弱さを認めることをせず、弱さを認めませんから、祈ることも、当然しません。

とことん、自分の弱さを認めたがらないんです。

“困った時の神頼み”ならず、“困った時のエジプト頼み”が、アブラハムの時代から、癖になっていて、なかなか辞められません。

神の前に弱さを認めるぐらいなら、エジプトに頼って、力の疑似体験をした方がよっぽどましだということです。

神の前に、弱さを認めず、自分の力で、自分の望む力を蓄え、その力を発揮していくことだけに集中した生き様と歴史ゆえにイスラエルが滅びたことを、ダニエルは、痛みを通り越すほどの痛みをもって、知っていました。

だから、ダニエルは、自分の弱さを認めて、なおも祈るのです。

90歳の高齢で、3週間もの断食祈祷をするなんて自殺行為だと、先ほど言いましたが、本当にこれは自殺行為なんですか？

ダニエルは、ここで命を懸けて祈ったわけではありません。  
元々、命なんかないんです。

“命を懸ける”というのは、“その命の所有が私にあって、私が持っている命という代価を払ってまで何かをする”という意味ですが、

ダニエルは、“命を懸けて祈った”のではなく、“命は主にある、主との語らいこそ命である”ということを知っていたわけです。

90歳の高齢で自殺行為じゃなくて、主との語らいをしないことこそ自殺行為であるということです。

だから、獅子の穴まで入っていくんです。

獅子の穴に入らずに、主との語らいを辞めることこそ自殺行為で、

獅子の穴に入ってもなお、祈ることにこそ、命があると知って祈ったわけです。

#### Part Four

ここ最近、妻と共に、インターネットで、その講義やメッセージを時折拝見している先生がいるのですが、その方は、私の卒業した神学校の一学年先輩で、現在、その神学校の教会史の教授をなさっている方なんです。

もうその笑顔あふれる顔を映像で拝見するだけでも、こっちは笑顔になるし、講義やメッセージの内容もすばらしくて、涙あり、笑いあり、知識も豊富で、神の愛と温かさと情熱を感じるんです。

所謂学歴もすごくて、本も何冊も出版され、その講義があまりにも素晴らしいので、神学校の講義のみならず、色んな所に呼ばれて引っ張りだこなんです。

なのに、とても謙遜で、優しく、昔と全然変わらない品性とユーモアまであって、もうずっと憧れの先輩であって、こんな人になりたいと思わせる方なんです。

この先生と出会ってから、20年近く経つのですが、「この人は、なんでこんなにも博学で、能力があつて、謙遜で、優しく、こんなにも神様に用いられて、大変なご苦勞もたくさんされたのに、なんでこんなに明るく、信仰的でいられるんだろうか。」と、いつも恨めしく思っていたのですが、

その理由を、先々週の神田明美先生のオープン礼拝のメッセージを通して、パズルのピースがパチパチとはまるように、涙ながらに教えられました。

それは、誰よりもご自部の弱さを認め、ご自分の知識の足りなさを認め、ご自分の力の無さを認め、神の前にあって欠けだらけの者であることを、正直にいつも認めているからなんだということです。

私のように、本1冊読んで、なんか知恵者になったかのように勘違いし、すごい講義を聞いてあたかも自分がその講義が出来るような気になり、聖書を4、5章読んで悟ったかのように錯覚し、祈れば祈ったことを誇りたくなり、人に会えばその人を見下せる要素を無意識のうちに捜し、その人の良い点よりも欠点を見つけ、その人から学ぶよりも教えようとし、弱さではなく自分の強さを誇るのではなく、

本を読めば読むほどにご自分の知識の無さを認め、講義やメッセージをすればするほどにご自分の足りなさを認識し、聖書を読めば読むほどに罪深いご自分を憂い、祈れば祈るほどに祈りの足りないご自分を嘆き、人に会えば、見下したり、色眼鏡で見るのではなく、その人の良いところを見て、その人から学ぼうとし、自分の弱さを素直に認めることが出来ておられるから、その欠けだらけの器から、主イエス様の光が燦燦と輝いているんだと、気付かされました。

そして、ご自分の弱さをもってなお、祈っているからなんだと、気付かされました。

自分の強さを打ち立てて、その強さのうちにキリストがさらにその強さを倍にしてくれることを願うようではなく、

弱さのうちに現れるキリストをいつも慕い求めながら、生きているから、努力できるんだと気付かされたんです。

「僕は、弱いふりは上手いけど、本当に弱いなんて、本当は思っていない。弱いふりをして、自分の力を誇示することばかりを考えている。神様が注いでくださった恵みを、自分の強さだと勘違いしているから、こんななんだ。」と思わされてしまいました。

## Conclusion

さらにもう一つ、この先生がこの先生のようになったのは、“弱い中に表れる祈りが積まれたから” なんだと知りました。

この先生のお父さんが3年前に召されたのですが、最後の2週間はホスピスで過ごされ、だいぶ体力も弱り、認知症も進んでいたそうなんです。

先生は、毎朝、教会の早天祈祷会に行ったその帰りに、ホスピスにおられるお父さんに会いに行っていました。

そして、お父さんが、息子に会うと、いつも手を伸ばしてくるんですって。

すると、息子は、頭を下げて、お父さんの手のひらの下に頭を入れるんです。接手の祈りのような姿になるんです。

で、このお父さんという方は、私が2年半伝道師として働いた教会の主任牧師だった安満壽先生という方なんです。(神学生だった私と清野先生と安満壽先生とで、食事をしたことも以前ありました。)

でなんで、息子を見た安満壽先生が手を伸ばしてきたかと言いますと、子供の頃から、特に高校2年生の頃から結婚するその日までは、毎日、息子の頭の上に手を置いて、祝福の祈りをしてくださっていて、

死を間近にして体力が衰え、認知症が進んでおられるにもかかわらず、息子を見たら、自然に手が伸びて、なお、息子のために祈ろうとされたからなんです。

死ぬまで、息子の頭の上に手を置いて、主イエス様の祝福を祈ることをお辞めにならなかったんです。

息子のために、神の祝福を祈ることが、身に染みついておられたんです。

このお話を聞いて、「ああ、僕の憧れの先輩は、この祈りによってなっているんだ。子供はこうやって育てるんだ。」と、今更ながら知りました。

死を間近にした弱さの中でも、息子の祝福を祈ることが、主に我が子を委ねることが身に染みついて離れないほどの祈りによって、育てられたんだと、知りました。

弱いから祈る。 弱いからこそ祈る。

弱い時に祈る祈りに、神の業が現れるんだと、教えられました。

ダニエルは、なおも、祈りました。

弱さを認め、なおも祈りました。

弱くていいんです。

いや、弱いことを認めましょう。

そして、祈りましょう。

なぜならば、弱さを認める祈りに、主の栄光が現れるからです。

お祈りいたします。

祝祷：ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。